第７章　一般動詞

■動詞

（１）述語動詞と動詞

私たちはしばしば「動詞」という用語を二つの意味で使っています。一つは文の構造の中で述部の中心としての「動詞」です。こういう場合の「動詞」を本来「述語動詞」（Predicate verb）と言うのですが、単に「動詞」と呼ぶことがあります。この場合、**01.** のように主語に続く動詞的要素全体（**01.**の例文では助動詞 can と一般動詞 speak の両方）を指すのが普通です。もう一つの場合は、名詞・形容詞・副詞などの品詞分類上の呼び名としての「動詞」があります。この場合も単に「動詞」（verb）と呼んでいます。

01.　He can speak English.
主語　述語動詞

（２）動詞（Verb）の定義

動詞は一般的に「形態上の屈折語尾（-s, -ed, -ing など）を持ち、動作・状態・存在などを表す語」と説明されますが、完璧な定義は未だ存在していません。それゆえ、大抵の場合、動詞の様々な特質によって動詞を分類し、それによって動詞を見ていく方法がとられます。

（３）動詞の形態

言語によっては決まった動詞の語尾を持つ言語と決まった動詞の語尾を持たない言語があります。例えば、日本語の動詞の場合、言い切った形（これを終止形という）が、「遊ぶ」（asobu）、「見る」（miru）、食べる（taberu）、「する」（suru）のように、語末が u 段の音で終わるという決まった動詞の語尾を持っています。つまり、形態から動詞を識別することが可能だということです。これに対して、英語の動詞は、play, see, eat, do のように、動詞を見分ける形態上の特徴を持ち備えていません。さらに言えば、例えば、face という語は、単語の形からだけでは「顔」という名詞なのか「直面する」という動詞なのかさえも判別できません。

Dr. Higgins's room

英語の動詞もかつて（Old English の時期：凡そ 700 年～1150 年頃）は、日本語と同じように、全ての動詞に共通の活用語尾 - an を持っていました。しかし、その次の時期（Middle English の時期：凡そ 1150 年～1500 年頃）の間に、 - an は - en→ - e と変化し、更にその次の時期（Modern English の時期：凡そ 1500 年以降）には、 - e はとうとう消失しまい、全ての動詞に共通の活用語尾がなくなってしまいました。

（４）定形と非定形

動詞のうち、文法上の主語を持ち、その主語によって人称・数・時制・法などの制約を受けるものを「定形動詞」（finite verb）といい、そういう動詞の形を「動詞の定形」（finite form）または「定動詞形」（finite verbal form）といいます。これに対して、文法上の主語を待たず、そのため文法上主語によって制約を受けない動詞の形を「動詞の非定形」（infinite form）といいます。動詞の非定形は「準動詞」（verbal）とも呼ばれ、不定詞（infinitive）、分詞（participle）、動名詞（gerund）の３種類があります。例えば、**02.**～**04.**で、am, are, is は動詞の定形ですが、その後に続く playing は動詞の非定形ということになります。

02.　I am playing tennis.
03.　You are playing tennis.
04.　He is playing tennis.

（５）一般動詞とは何か

よく「be 動詞」に対して「一般動詞」といういい方をしますが、一体何が「一般」なのでしょうか？　そしてまた「be 動詞」の何が「一般」ではないというのでしょうか？実は「一般動詞」に相対する動詞は「特別動詞」と言います。それでは「特別動詞」とはどういうものでしょうか。それは否定文や疑問文の作り方において「特別な」方法を持っている動詞で、全部で 24 個あります。日本の英語教育に貢献した H.E. Palmer や A.S. Hornby らは「変則定形動詞」（anomalous finite）と名付けています。ここでは彼らに従って「変則定形動詞」という呼称を用います。

Dr. Higgins's room

Harold E. Palmer は 1877 年 3 月 6 日にロンドンに生まれます。1902 年 25 歳の時にベルギーに渡り、国際外国語学校で教職に就きます。ここで「ベルリッツ・メソッド」に出会い、後の「オーラル・メソッド」の誕生のための経験と知識を得ます。その後、ロンドン大学であのダニエル・ジョーンズ音声学者の下で講師として在職中に、日本政府から文部省英語教授顧問として招聘され、1922 年 3 月に 45 歳で来日、同年 5 月に設立された英語教授研究所（現語学教育研究所）の所長に就任します。以後 14 年間に渡り日本の英語教育の改革と改善に貢献します。その後を継いだのが弟子の Albert S. Hornby です。ホーンビーは 1898 年 8 月 10 にイングランドの北西の古都チェスターに生まれ、ロンドン大学で英文学を学び、1922 年に学位を取得し、1923 年に日本で英語教師として働く契約を結びます。そして翌 1924 年、26 歳の時に、大分高商（現大分大学）で英文学を教えるために来日しますが、日本人に必要なものは文学ではなく語学であると考えるようになり、1933 年から Palmer の後継者となります。そして 1942 年 3 月まで日本の英語教育の改革と改善に貢献します。

Dr. Higgins's room

定形動詞のうち、疑問文、否定文を作る際に、変則的な動詞が 24 個あります。これらを H.E. Palmer は変則定形動詞（anomalous finite）と名付けています。

24 の変則定形動詞	
現在時制	過去時制
am①／is②／are③	was④／were⑤
have⑥／has⑦	had⑧
do⑨／does⑩	did⑪
shall⑫	should⑬
will⑭	would⑮
can⑯	could⑰
may⑱	might⑲
must⑳	
ought㉑	
need㉒	
dare㉓	
	used㉔

注）①～⑤は「連結動詞」としても用いられます。
注）⑥～⑪は「一般動詞」としても用いられます。
注）①～⑪を「一次助動詞」、⑫～㉔を「二次助動詞」とも言いますが、後者は「法助動詞」というのが一般的です。

変則定形動詞は簡単に言えば「助動詞」なのですが、助動詞としてのみ用いられるとは限りません。例えば、次の（a）(b)の例文の is は助動詞ですが、(c）の例文の is は助動詞ではありません。（この場合の be 動詞は連結動詞と言います。）同じように、(d）の例文の have は助動詞ですが、(e）の例文の have は助動詞ではなく一般動詞です。

(a) John is wathing TV now.（現在進行形を作るときの is）

(b) John is liked by everybody in his class.（受動態を作るときの is）

(c) John is a junior high school student.

(d) I have finished my homework.（現在完了形を作るときの have）

(e) I have two brothers.

■一般動詞

（１）動詞の形態

一般動詞は、①原形、②現在形、③過去形、④過去分詞形、⑤～ing 形の５つに語形に変化しますが、全ての一般動詞が５つの異なる語形を備えているわけではありません。例えば、下表の（ⅱ）のように原形と三人称単数以外の現在形と過去分詞形が同じもの、（ⅲ）のように過去形と過去分詞形が同じもの、（ⅳ）のように原形と三人称単数以外の現在形と過去形と過去分詞形が同じもの等いろいろな変化のパターンがあります。この５つの語形のうち、単独で述語動詞になることができるのは現在形と過去形だけです。

原形		現在形		過去形	過去分詞形	～ing 形
		三人称単数	その他			
(ⅰ)	go	goes	go	went	gone	going
(ⅱ)	run	runs	run	ran	run	running
(ⅲ)	walk	walks	walk	walked	walked	walking
(ⅳ)	cut	cuts	cut	cut	cut	cutting

① 原形

動詞の原形は、不定詞、命令形、直説法現在、仮定法現在で用いられます。不定詞の場合、原形の前に to の付く to 不定詞と to の付かない原形不定詞とがあります。

05. You can read this book.（原形不定詞）

（君はこの本を読むことができるよ。）

06. He likes to read books.（to 不定詞）

（彼は本を読むのが好きです。）

07. Read this letter.（命令形）

（この手紙を読みなさい。）

08. I read a book for thirty minutes before going to bed everyday.（直説法現在）

（私は毎日寝る前に３０分間本を読みます。）

09. If he read this story, he will get angry at its plot.（仮定法現在）

（もし彼がこの物語を読めば、そのプロットに怒るだろう。）

② ３人称単数現在形

主語が３人称単数の時で、現在形を用いる場合には、一般動詞の語尾に-s 又は-es を付けます。通例、これを「３単現の s」と呼びます。

	一般動詞の語尾	-(e)s の付け方	-(e)s の発音	例
(ⅰ)	[s] [z] [ʃ] [ʒ] [ʧ] [ʤ] ※1	-es を付ける	[iz]	wash ⇒ washes
(ⅱ)	-o	-es を付ける	[z]	go ⇒ goes
(ⅲ)	子音字＋y ※2	-y を i にして-es を付ける	[z]	cry ⇒ cries
(ⅳ)	(ⅰ)(ⅱ)(ⅲ)以外	-s を付ける	動詞語尾が無声音なら[s] ※3	like ⇒ likes
			動詞語尾が有声音なら[z] ※4	come ⇒ comes

※1… [ʒ] の音で終わる語は少ない。フランス語からの借用語に見られるが、英語化すると[ʤ]となる。
※2…〈母音字＋y〉で終わる語には s をつける。s の発音は[z]。
※3… 無声音とは声帯が振動しない音のことである。
※4… 有声音とは声帯が振動する音のことである。

Dr. Higgins's room

「主語が３人称単数のときになぜ一般動詞の現在形には s をつけるのか？」この質問に答えるには、英語の歴史的な変遷を見なければなりません。つまり「英語史」の分野のお話になります。ちょっと複雑ですが簡単に説明しましょう。英語の最も古い時期である Old English（700 年～1150 年頃）においては、主語が単数の場合には、一般動詞は主語の人称に応じてそれぞれの活用語尾を備えていました。つまり、主語に応じて動詞の形が変化しました。そしてこの時代を通じて、発音の変化や屈折の消失を続けて英語は徐々に変化していきますが、英語の発達に大きな変化をもたらす大事件が 1066 年に起こります。ノルマン人の英国征服（Norman Conquest）です。これによって、およそ 300 年間に渡り英国の公用語はフランス語になり、英語は方言的な特徴を発達することになります。その時代が Middle English（1150 年～1500 年頃）の時代です。この時代の方言を大別すると、北部方言、中部方言、南部方言の三つに分けることができます。動詞の活用語尾の違いを比較すると下表のようになります。さて、本題の「主語が３人称単数のときなぜ一般動詞の現在形には s をつけるのか？」という質問に対する答えですが、次の Modern English（1500 年以降）になると、１人称の動詞語尾の-e は消失してしまい、２人称の動詞語尾は単数の主語である thou（「汝は」）の廃用と共に用いられなくなります。３人称の動詞語尾は、-es と-eþ（＝eth）の混用時代がありますが、やがて北部方言の-es が３人称単数時の動詞語尾として定着したというわけです。では、なぜ北部方言の-es が残存して普及していったのかについて明確に説明できるものはありませんが、頻用される動詞の is の類推と考える学者もいます。

		北部方言	中部方言	南部方言
単数	１人称	-e	-e	-e
	２人称	-es	-est	-est
	３人称	-es	-eþ（＝-eth）※	-eþ（=-eth）
複　　数		-es	-en	-eþ（=-eth）

※［θ］の音や［ð］の音は Old English から Middle English の初期まではルーン文字の þ（ソーン）が用いられていたが、やがて、th でもって書き表されるようになります。

③ 過去形と過去分詞形

過去形と過去分詞形は、その作り方の違いによって規則動詞と不規則動詞の２種類があります。

【規則動詞の作り方】

	一般動詞の語尾	-(e)d の付け方	例
(ⅰ)	-e	-d を付ける	like ⇒ liked
(ⅱ)	子音字＋-y	-y を i にして-ed を付ける	study ⇒ studied
(ⅲ)	母音字＋-y	そのまま-ed を付ける	stay ⇒ stayed
(ⅳ)	短母音＋子音字	子音字を重ねて-ed を付ける	stop ⇒ stopped
(ⅳ) の例外		強勢の位置が最終音節でない動詞、あるいは母音が二文字で表されている場合には子音字は重ねない。 vísit⇒vísited（強勢の位置が最終音節でない） look⇒looked（母音が-oo-の二文字で表されている）	
(ⅴ)	母音字＋r	r を重ねて-ing を付ける	prefer ⇒ preferred
(ⅴ) の例外		強勢の位置が最終音節でない動詞は、r は重ねない。 ánswer⇒ánswered, álter⇒áltered, cóver⇒cóvered, consíder⇒consídered, discóver⇒discóvered, delíver⇒delívered, díffer⇒díffered, fávour⇒fávoured, gáther⇒gáthered, órder⇒órdered, remémber⇒remémbered, rúmour⇒rúmoured	
(ⅵ)	母音字+l	《英》では l を重ねる。《米》では l は一つ。	travel ⇒ travelled / tarveled
(ⅶ)	-c [k]	k を加えて-ed を付ける	picnic ⇒ picnicked
(ⅶ) の解説		仮に picniced とすれば、[píknist]と発音される。なぜなら英語の綴り字のルールで-ci-, -ce-, -cy- の -c- を[k]と発音することはないからである。	

Dr. Higgins's room

上記表中の（iv）に関してもう少し詳しく説明をしましょう。結論から言えば、子音字を重ねるときはその直前の短母音に強勢があるということです。例えば、intermít は intermítted となりますが、vísit は vísited となります。ところが幾つかの例外があります。例えば、hándicàp は-ed に先行する短母音は第一強勢ではなく第二強勢なのですが、hándicàpped と綴ります。このような例として他に zígzàg ⇒ zígzàgged, húmbùg ⇒ húmbùgged, hóbnòb ⇒ hóbnòbbed, prógràm ⇒ prógràmmed, wórship ⇒ wórshipped, kídnap⇒kidnapped などがあります。

-ed の発音には[d] [t] [id]の３通りがあります。

【−ed の発音】

	−ed の発音	動詞の語尾	例
(ⅰ)	[d]	[d]以外の有声音の語尾で終わるとき	called, played
(ⅱ)	[t]	[t] 以外の無声音の語尾で終わるとき	looked, washed
(ⅲ)	[id]	[d] [t] の語尾で終わるとき	minded, visited

【不規則動詞のパターン】

	変化のパターン	例
(ⅰ)	過去形と過去分詞形が同じ	meet-met-met
(ⅱ)	原形と過去形が同じ	beat-beat-beaten
(ⅲ)	原形と過去分詞形が同じ	come-came-come
(ⅳ)	三つとも異なる	speak-spoke-spoken
(ⅴ)	三つとも同じ	cut-cut-cut

不規則動詞は主に母音交替によって作られますが、原形 - 過去形 - 過去分詞形とその変化の仕方を見ていくと、大体上表の５つのパターンに分けられます。(ⅰ) 過去形と過去分詞形が同じ（ⅱ）原形と過去形が同じ（ⅲ）原形と過去分詞形が同じ（ⅳ）三つとも異なる形（ⅴ）三つとも同じ形の５つです。

Dr. Higgins’s room

Old English（700 年～1150 年頃）の動詞は他のゲルマン語と同様に、強変化動詞と弱変化動詞に分類されます。強変化動詞とは母音の交替（アプラウト）によって過去形と過去分詞形を作ります。これが現代の不規則変化動詞にあたります。これに対して弱変化動詞とは語幹に-d または-t の語尾をつけることによって過去形と過去分詞形を作ります。これが現代の規則変化動詞にあたります。

④ 〜ing 形

〜ing 形には二つの種類があります。一つは形容詞の働きをする現在分詞です。be 動詞＋現在分詞で進行形を作ります。もう一つは動詞と名詞の働きを一つにした動名詞です。

	一般動詞の語尾	-(e)s の付け方	例
(ｉ)	発音しない-e	-e を除いて-ing を付ける	make ⇒ making
(ⅱ)	発音する-e	-ing を付ける	see ⇒ seeing
(ⅲ)	-ie	-ie を y にして-ing を付ける	die ⇒ dying
(ⅳ)	短母音＋子音字	子音字を重ねて-ing を付ける	get ⇒ getting
(ⅳ) の例外		強勢の位置が最終音節でない動詞は、子音字は重ねない。 vísit⇒vísiting, límit⇒límiting, inhábit⇒inhábiting, inhérit⇒inhériting, prohíbit⇒prohíbiting, prófit⇒prófiting	
(ｖ)	母音＋r	r を重ねて-ing を付ける	prefer ⇒ preferring
(ｖ) の例外		強勢の位置が最終音節でない動詞は、r は重ねない。 ánswer⇒ánswering, álter⇒áltering, cóver⇒cóvering, consíder⇒consídering, discóver⇒discóvering, delíver⇒delívering, díffer⇒díffering, fávour⇒fávouring, gáther⇒gáthering, órder⇒órdering, remémber⇒remémbering, rúmour⇒rúmouring, máster⇒mástering, óffer⇒óffering	
(ⅵ)	母音字+l	《英》では l を重ねる。《米》では l は一つ。	travel ⇒ travelling / tarveling
(ⅶ)	-c [k]	k を加えて-ing を付ける	picnic ⇒ picnicking
(ⅶ) の解説		仮に picnicing とすれば、[píknisiŋ]と発音される。なぜなら英語の綴り字のルールで-ci-, -ce-, -cy- の -c- を[k]と発音することはないからである。	

Dr. Higgins's room

上記表中の（ⅳ）に関してもう少し詳しく説明をしましょう。結論から言えば、子音字を重ねるときはその直前の短母音に強勢があるということです。例えば、intermít は intermítting となりますが、vísit は vísiting となります。ところが幾つかの例外があります。例えば、hándicàp は-ing に先行する短母音は第一強勢ではなく第二強勢なのですが、hándicàpping と綴ります。このような例として他に zígzàg ⇒zígzàgging, húmbùg⇒húmbùgging, hóbnòb⇒hóbnòbbing, prógràm⇒prógràmming, wórship⇒wórshipping, kídnap⇒kidnapping などがあります。

（２）否定文と疑問文の作り方

① 否定文

「・・・する」「・・・している」と肯定する文のことを肯定文と言います。それに対して「・・・しない」「・・・していない」と否定する文のことを否定文と言います。一般動詞を含む文の否定文の作り方は一般動詞の直前に〈do + not〉を付けます。但し、主語が３人称単数の場合は、〈does + not〉を付けます。

【like を例に否定文の作り方の表】

		主　語	一般動詞	否定形	短縮形
１人称	単 数	I	like	do not like	don’t like
	複 数	we			
２人称	単 数	you			
	複 数	you			
３人称	単 数	he	likes	does not like	doesn’t like
		she			
		it			
	複 数	they	like	do not like	don’t like

② 疑問文の作り方

「一般動詞を含む文の疑問文の作り方は主語の前に Do を置きます。但し、主語が３人称単数の場合には Does を置きます。

【疑問の作り方とその応答の例】

		主　語	疑問文の語順	答え方
１人称	単 数	I	Do I ～?	Yes, you do.　／　No, you don’t.
	複 数	we	Do we ～?	
２人称	単 数	you	Do you ～?	Yes, I do.　／　No, I don’t.
	複 数	you		Yes, we do.　／　No, we don’t.
３人称	単 数	he	Does he ～?	Yes, he does.　／　No, he doesn’t.
		she	Does she ～?	Yes, she does.　／　No, she doesn’t.
		it	Does it ～?	Yes, it does.　／　No, it doesn’t.
	複 数	they	Do they ～?	Yes, they do.　／　No, they don’t.

■他動詞と自動詞

一般動詞には目的語を必要とする動詞と目的語を必要としない動詞があります。目的語を必要とする動詞を他動詞（transitive verb）、目的語を必要としない動詞を自動詞（intrasitive verb）といいます。

（１）他動詞と自動詞の識別

日本語で同一または同様の意味を表すのに、他動詞と自動詞の両方で表現できる場合がよくあります。もちろん、両者の表現が全く等しいわけではありませんが、本質的意味においてはほぼ同じと言えます。この場合、他動詞を使う場合はその直後に目的語が置かれますが、自動詞を使う場合は前置詞が間に入ります。そして〈前置詞＋名詞〉は修飾語になり目的語とは言いません。

10. We visit that nursing home every day.（他動詞）（私たちは毎日あの老人ホームを訪れます。）
目的語

11. We go to that nursing home every day.（自動詞）（私たちは毎日あの老人ホームに行きます。）
修飾語

12. We reach the station at nine thirty.（他動詞）（私たちは９時半に駅に到着します。）
目的語

13. We arrive at the station at nine thirty.（自動詞）（私たちは９時半に駅に到着します。）
修飾語

14. We get to the station at nine thirty.（自動詞）（私たちは９時半に駅に到着します。）
修飾語

15. Can I see a movie?（他動詞）（映画をみてもいいですか。）
目的語

16. Can I look at the menu?（自動詞）（メニューをみてもいいですか。）
修飾語

17. Please don't enter that room.（他動詞）（あの部屋には入らないで下さい。）
目的語

18. Please don't go into that room.（自動詞）（あの部屋には入らないで下さい。）
修飾語

Dr. Higgins's room

中学生に英文を書かせると、「東京を訪れる」を visit to Tokyo と書き、「ラジオを聴く」を listen the radio と間違って書く者がいます。これは「東京に行く」を go to Tokyo、「物音が聞こえる」を hear the sound ということからの類推でそのように間違うのだと思われます。しかし、visit は他動詞なのでその直後には名詞がこなければなりません。それゆえ、「東京を訪れる」は visit Tokyo と書かなければなりません。一方、listen は自動詞なのでその直後には前置詞が必要になり、「ラジオを聴く」は listen to the radio が正しいわけです。辞書には、自動詞の用法には 自 又は vi. の印、他動詞の用法には 他 又は vt. の印がついています。日本語表現から判断するのではなく、辞書でその動詞が自動詞表現であるのか他動詞表現であるのかを調べることが重要です。

（２）他動詞と自動詞の両方で用いられる動詞

「運動」や「変化」を表す動詞の多くは、他動詞の目的語を主語にして、自動詞構文を作ることがよくあります。このような特徴を持つ動詞を能格動詞といいます。

19. **We began the meeting.**（他動詞）（私たちは会議を始めた。）
目的語
20. **The meeting began.**（自動詞）（会議は始まった。）
主語

21. **John rings the bell at seven.**（他動詞）（ジョンは７時にベルを鳴らします。）
目的語
22. **The bell rings at seven.**（自動詞）（ベルは７時に鳴ります。）
主語

23. **John broke the vase.**（他動詞）（ジョンは花瓶を壊しました。）
目的語
24. **The vase broke.**（自動詞）（花瓶は壊れました。）
主語

25. **John opened the door slowly.**（他動詞）（ジョンはゆっくりとドアを開けました。）
目的語
26. **The door opened slowly.**（自動詞）（ドアがゆっくりと開きました。）
主語

27. **John rolled the stone.**（他動詞）（ジョンは石を転がしました。）
目的語
28. **The stone rolled.**（自動詞）（石は転がりました。）
主語

29. **John stopped the car.**（他動詞）（ジョンは車を止めました。）
目的語
30. **The car stopped.**（自動詞）（車は止りました。）
主語

Dr. Higgins's room

世界の言語の中には自動詞の主語と他動詞の目的語が同一の格表示を受けるものがあります。言い換えれば、自動詞の主語と他動詞の目的語が同等に扱われるわけです。このような両者の対応関係を能格性といい、そういう関係を持つ言語を能格言語と言います。英語は能格言語ではありませんが、英語の動詞にも「運動」や「変化」を表す動詞には能格性が見られる動詞が多くあります。そういうものを能格動詞と呼んでいます。例えば、上例の 29. と 30. を見比べると、29. の他動詞の目的語の the car は 30. の自動詞文の主語の the car になっており、ともに動詞が表わす運動や変化を受ける対象になっています。

（３）自動詞→他動詞として用いられる動詞

普通、自動詞として使われる動詞が目的語をとって他動詞として用いられるとき、例えば、「座る」が「～を座らせる」、「飛ぶ」が「～を飛ばす」、「歩く」が「～を歩かせる」などのように「…する」が「…させる」というように使役の意味を持つ場合が多くあります。

31. The water in the kettle is boiling.（自動詞）
（やかんの水が沸いています。）

32. Please boil the water in the kettle.（他動詞）
（やかんの水を沸かしてください。）

33. John failed in the written paper.（自動詞）
（彼は筆記試験に落ちました。）

34. The teacher failed John on the written paper.（他動詞）
（先生は筆記試験でジョンを落としました。）

35. The model airplane flew.（自動詞）
（模型飛行機が飛びました。）

36. John flew the model airplane.（他動詞）
（ジョンは模型飛行機を飛ばしました。）

37. Coffee grows in Brazil.（自動詞）
（コーヒーはブラジルで産します。）

38. They grow coffee in Brazil.（他動詞）
（彼らはブラジルでコーヒーを栽培しています。）

39. The baby sat on the chair.（自動詞）
（赤ちゃんは椅子に座りました。）

40. She sat the baby on the chair.（他動詞）
（彼女は赤ちゃんを椅子に座らせた。）

41. The ladder stood against the wall.（自動詞）
（梯子が壁にたて掛けてあった。）

42. They stood the ladder against the wall.（他動詞）
（彼らは梯子を壁にたて掛けました。）

43. His dog is walking.（自動詞）
（犬が歩いています。）

44. He is walking the dog.（他動詞）
（彼は犬を歩かせています。）

45. A lot of children were working.（自動詞）
（たくさんの子どもが働いていました。）

46. They were working a lot of children.（他動詞）
（彼らはたくさんの子どもをこき使っていました。）

（４）他動詞→自動詞として用いられる動詞

一般に他動詞として用いられる動詞が、目的語が明白なために、或は、逆に目的語が不明瞭なために、その目的語が示されず自動詞として機能する場合があります。このような動詞を疑似自動詞と言います。復元されるべき目的語の種類によって、疑似自動詞は以下の①～④の四つのグループに分けられます。

① 省略されている目的語がほぼ一つに決まっている場合

47. He drinks far too much. （**drinks** の後に **liquor** が省略）
（彼はあまりにも（酒を）飲み過ぎます。）

48. Where shall we eat this evening? （**eat** の後に **dinner** が省略）
（どこで（夕ご飯を）食べましょうか。）

49. Can you drive? （**drive** の後に **a car** が省略）
（あなたは（車が）運転できますか。）

50. She waved to me. （**waved** の後に **her hand** が省略）
（彼女は私に（手を）振りました。）

51. John writes to his mother every month. （**writes** の後に **a letter** が省略）
（ジョンは毎月母に（手紙を）送っています。）

52. Please do not talk to me when I'm reading. （**reading** の後に **a book** が省略）
（どうか（本を）読んでいるときに話しかけないで下さい。）

53. Do you smoke? （**smoke** の後に **a cigarette** が省略）
（あなたは（煙草を）吸いますか。）

Dr. Higgins's room

例えば、A のような質問に対して B のように答えるとどうでしょうか。

A: Would you like to eat some cake?　（ケーキを召し上がりませんかいか）

B: No, thanks.　I don't care to eat just now.　（いいえ、結構です。今は何も食べたくありません）

つまり、目的語の cake を省略してしまうと、eat は eat（meal）と解され、「食事をする」になってしまい、「今は、食事をしたくない」という意味になってしまいます。「今は、ケーキは食べたくありません」と答えるなら、C のように答えなければなりません。

C: No, thanks.　I don't care to eat any just now.

② 省略されている目的語が比較的狭い範囲に限定される場合

54. Someone is knocking at the door. Go and answer. （**answer** の後に **the door** が省略）

（誰かがドアを叩いている。（玄関に）取次ぎに出てくれ。）

55. Can anyone answer? （**answer** の後に **the question** が省略）

（誰か（この質問に）答えられますか。）

56. You should wash before dinner. （**wash** の後に **your hands** が省略）

（食事の前に（手を）洗いなさい。）

57. She washes twice a week. （**washes** の後に **clothes** が省略）

（彼女は週２回（衣服を）洗濯をします。）

58. I washed, shaved and change. （**washed** の後に **my face** が省略）

（私は（顔を）洗い、髭を剃り、服を着替えた。）

③ 省略されている目的語が文脈で決まる場合

59. You have to change at the station. （**change** の後に **trains** が省略）

（その駅で（電車を）乗り換えなければなりません。）

60. I'll just slip upstairs and change before dinner. （**change** の後に **clothes** が省略）

（夕食の前に二階に上がって（服を）着替えましょう。）

④ 省略されている目的語が **something** ないし **someone** と解釈される場合

61. Cats see in the dark. （**see** の後に **?** が省略）

（猫は暗闇で（ものが）見えます。）

62. Animals can not speak. （**speak** の後に **?** が省略）

（動物は（ものが）喋れません。）

> Dr. Higgins's room
> **他動詞の目的語としての再帰代名詞が省略された場合も、他動詞の自動詞化といえます。例えば、**
> He shaves (himself) before breakfast. （**彼は朝食前に髭を剃ります**）
> How long does it take you to dress (yourself)?（**君は服を着るのにどれくらい時間がかかりますか**）
> We hid (ourselves) in the wood.（**我々は森に身を隠しました**）
> He never washes (himself) in cold water. （**彼は冷水で体を洗うことはありません**）

（５）必ず修飾語を必要とする自動詞

自動詞の中には、場所を規定する修飾語句を義務的に必要とする自動詞があります。

63. We live in Okinawa.
（私たちは沖縄に住んでいます。）

64. Okinawa lies to the south of Kyushu.
（沖縄は九州の南方にあります。）

65. This street leads to the station.
（この道は駅に出ます。）

66. My parents remained in Japan.
（両親は日本に残りました。）

67. My uncle is staying at a hotel.
（おじはホテルに滞在しています。）

68. The house stood by a lake.
（その家は湖畔にありました。）

69. The forests extend as far as the horizon.
（森林は地平線の彼方まで広がっています。）

70. Kijimuna dwell in the forest.
（キジムナーは森に住んでいます。）

71. His father dresses with elegance.
（彼の父は身なりが上品です。）

Dr. Higgins's room

自動詞は目的語を必要としない動詞であるのですが、実は自動詞には修飾語句を義務的に必要とするものと、修飾語句を必ずしも必要としないものがあります。C.T.Onions（1904）によって提唱された、いわゆる５文型では、この２種類の自動詞の区別がつけられていません。例えば、次の(a),(b)ともに、C.T.Onions の５文型では「S＋V」の第１文型になりますが、例文(a)は修飾語句の有無に関わらず文として成立するのに対し、例文(b)は修飾語句を取り除いてしまうと文として成立しません。この問題点を修正したのが Quirk et al.(1985)の７文型です。Quirk は義務的副詞語句を付加詞(Adjunct)と呼び、S＋V＋A の文型を設けています。

(a) She slept on the sofa.　（彼女はソファーの上で眠りました。）
S　V　修飾語句

(b) She lay on the sofa.　（彼女はソファーの上で横になりました。）
S　V　修飾語句

【Quirk et al.の７文型】

ⅰ．S+V
ⅱ．S+V+A
ⅲ．S+V+C
ⅳ．S+V+O
ⅴ．S+V+O+A
ⅵ．S+V+O+O
ⅶ．S+V+O+C

（６）同族目的語をとる動詞

本来、自動詞である動詞が同根の、或は関連のある名詞を目的語にとる用法が古くからあります。こういう目的語を同族目的語と言います。目的語と呼ばれますが、その動詞はは自動詞です。それゆえその目的語と呼ばれる名詞は副詞的機能を果たしている場合が多い。

72. I dreamed a curious dream last night.

（私は昨夜奇妙な夢を見ました。）

73. My grandfather died a natural death.

（祖父は天寿を全うしました。）

74. My grandmother lived a useful life.

（祖母は充実した生活を送りました。）

75. Robins sing a beautiful song.

（コマドリが美しい声で鳴いています。）

76. She smiled a warm and friendly smile.

（彼女は心から親しげに笑いました。）

77. Father laughed his three dry, precise *ha's*.

（父はいつもの乾いた声をたてて正確にハ、ハ、ハと笑いました。）

78. They fought a good fight.

（彼らは善戦しました。）

79. He slept a sound sleep.

（彼はぐっすり眠りました。）

80. We breathed a sigh of relief.

（私たちはほっと安堵の溜息をつきました。）

81. He was thinking happy thoughts.

（彼は楽しいことを想像していました。）

（７）再帰代名詞をとる動詞

主語と同じ代名詞に-self（主語が複数の場合は-selves）を付けたものを再帰代名詞といい、再帰代名詞を目的語にすると、再帰目的語と言います。他動詞の中には再帰目的語のみを目的語にとるものがあって、そういう動詞を再帰動詞と言います。

		主　格 （～は、～が）	所有格 （～の）	目的格 （～を、～に）	所有代名詞 （～のもの）	再帰代名詞 （～自身）
１人称	単数	I	my	me	mine	myself
	複数	we	our	us	ours	ourselves
２人称	単数	you	your	you	yours	yourself
	複数	you	your	you	yours	yourselves
３人称	単数	he	his	him	his	himself
		she	her	her	hers	herself
		it	its	it	its	itself
	複数	they	their	them	theirs	themselves

82.　John absented himself from the meeting.
（ジョンは会議を欠席しました。）

83.　You should avail yourself of this opportunity.　（アメリカでは avail of のように oneself が省くことがある）
（この好機を利用するべきです。）

84.　He prides himself on his English.
（彼は自分の英語を自慢にしています。）

85.　The witness perjured himself.
（その証人は偽証しました。）

Dr. Higgins's room

下の(a-1)のように、ある種の動詞（例えば meet（会う）のような動詞）は目的語に主語と同一人物を置くことはできず、(a-2)のように主語と目的語を同一人物ではないようにしなければなりません。逆に、(b-1)の behave（行動する）のように、目的語に主語と同一人物しかとれない動詞があります。他方、kill（殺す）のような動詞は目的語に主語と同一人物も主語と異なる人物もとることができます。

(a-1)＊I meet myself.

(a-2)　I meet him.

(b-1)　I behave myself.

(b-2)＊I behave him.

(c-1)　I kill him.

(c-2)　I kill myself.

注）＊（ｱｽﾃﾘｽｸ）はその文が非文であることを示す。

Jespersen（1924）は、behave のように、目的語に再帰代名詞以外の目的語をとらない他動詞を再帰動詞と呼んでいます。上例の 82.～85.などの動詞がそれにあたります。しかし、(c-2)のように、再帰代名詞を目的語としてとれるなら、そのような動詞も再帰動詞と呼んでいる学者もいます。

（８）能動受動態

形は能動態であるが受動態の意味を表すものがあります。この用法も他動詞が自動詞的に用いられる用法であると言えます。能動受動態（activo-passive）というのは Jespersen の用語です。

86. Butter cuts easily.
（バターは切り易い。）

87. Its meat eats like beef.
（その肉は食べると牛肉のような味がする。）

88. The book sells well.
（その本はよく売れています。）

89. The book reads easily.
（その本は読みやすい。）

90. These oranges peels very easily.
（このオレンジはとても楽に皮が剝けます。）

91. This cloth crumples very easily.
（この生地はすぐ皺になります。）

92. This skirt washes well.
（このスカートは洗っても傷まない。）

93. The car drives well.
（その車はよく走ります。）

94. Wet paper tends to tear easily.
（濡れた紙は破れ易い。）

95. Milk doesn’t keep well in warm weather.
（ミルクは暖かい時にはあまり持たない。）

96. These shoes will wear at least a year.
（この靴は少なくても一年はもちます）

97. This door locks automatically.
（このドアは自動施錠されます。）

98. This machine handles easily.
（この機械は扱い易い。）

Dr. Higgins’s room
能動受動態の構文にはいくつかの制約があります。
ｉ．主語の持つ特徴を述べる文であるため、動詞は、通例、現在時制でなければならない。
ⅱ．動詞は、通例、難易を表す様態の副詞または形容詞を伴わなければならない。そして、これらの副詞は新情報の焦点になっているため、削除されれば非文となる。

■動詞の分類

動詞の分類で、一般によく知られているのは「状態動詞」と「動作動詞」の二分類です。この二種類の動詞の文法的相違は、状態動詞は命令文・進行形が作れないのに対し、動作動詞は命令文・進行形が作れることにあります。

Dr. Higgins's room

動詞の分類はいろいろな文法家が試みていますが、最も有名なものの一つに、アメリカの言語学者 Zeno Vendler (1967)の分類があります。Vendler は動詞を時間的概念の特徴によって活動(activities)、達成（accomplishment）、到達（achievement）、状態（state）の４つに分類しています。

動　詞　の　分　類		時　間　的　概　念　の　特　徴
進行形を作れる	活動動詞	終着点(terminal point)がない。
	達成動詞	終着点(terminal point)がある。
進行形を作れない	到達動詞	終着点(terminal point)がある。一瞬にして起こって終わる。
	状態動詞	終着点(terminal point)がない。ある期間に渡って続く

(a) He is pushing a cart.（活動動詞）

(b) He is running.　（活動動詞）

(c) He is drawing a circle.　（達成動詞）

(d) He is running a mile.　（達成動詞）

(e) He reached the top at noon sharp.　（到達動詞）

(f) He spottd the plane at 10:53 A.M.　（到達動詞）

(g) He loved her for three years.　（状態動詞）

(h) He believed in the stork till he was seven.　（状態動詞）

Vendler は先ず動詞を、What are you doing? という疑問文に対して、進行形で答えることができるか否かで大きく２つに分けています。そして進行形を作れるグループは終着点（terminal point）を持っているか否かでさらに２つに分けています。終着点とは行為成就のための目標点だと考えられます。例えば、(a) や (b) の例文で行為が中断されたとしても、実際に「カートを押した」のであり、「走った」のであるから、行為が成就されなかったとは言えません。しかし、(c) や (d) の例文において行為が中断されたとすると、実際には「円を描いた」とは言えないし、「１マイル走った」とは言えないわけです。つまり行為は成就されていないということです。(a) や (b) のような終着点を必要としない動詞を活動動詞（activity terms）と呼び、(c) や (d)のように終着点を必要とする動詞を達成動詞（accomplishment terms）と命名しています。一方、進行形を作れないグループも終着点（terminal point）に視点をおいて考えています。例えば、(e) や (f) の例文で用いられている reach, spot などの動詞は行為を成し遂げる上で明確な一瞬の時（ at a definite moment ）があればよいと言うわけです。このような動詞を Vendler は到達動詞(achievement terms)と命名しています。これに対し、(f) や (g) の例文で用いられている動詞は短期間又は長期間に渡っての主語の状態を表す状態動詞（state terms）であると言えます。

（１）状態動詞

「状態」を表す動詞は、本質的にものごとの継続を表しているので、通例、継続状態を表す進行形は作れません。また、動作でないので命令文で使われることもできません。状態動詞は大体次の①～④に細分化できます。

① 感覚を表す動詞

99. I hear the sound of a siren.

（サイレンの音が聞こえます。）

100. I'd like to hear some music.

（何か音楽を聴きたいものです。）（何かしながらぼんやり聞く場合は hear）

101. They heard the teacher saying something, but didn't listen to him.

（彼らは先生が何か言っていることは耳に入りましたが、注意して聞こうとはしませんでした。）

102. We see a lot of stars here at night.

（当地は夜にはたくさんの星が見えます。）

103. Cats can see in the dark.

（猫は暗闇でも目が見えます。）

104. Can you see that ship on the horizon?

（水平線のあの船が見えますか。）

105. I saw a man go past, but didn't looke at him.

（誰かが通ったようでしたが、注意して見ませんでした。）

106. I smell flowers.

（花の香りがします。）

107. The dog smelled his shoes

（その犬は彼の靴を嗅ぎました。）

108. I smell something burning.

（何かが焦げるにおいがします。）

109. I can taste the ginger in this cake.

（このケーキはジンジャーの味がします。）

110. The cook tasted the soup bfore he added salt.

（コックは塩を加える前にスープの味をみました。）

111. The stew tastes salty.

（シチューはしょっぱい味がします。）

112. This soup tastes strongly of fish.

（このスープは非常に魚臭い味がします。）

113. This coffee tastes faintly of almonds.

（この珈琲はほのかにアーモンドの味がします。）

Dr. Higgins's room

無意志的な行為の感覚動詞は、通例、進行形を作れないのですが、「意志のある動作」を表す場合には進行形を作ることができます。そのことについて若干補足説明をしていきましょう。

【hear について】

無意志的な「～が聞こえる」という場合には進行形は作れませんが、「(講演や講義や演奏会などを) 聞く、耳を傾ける」という意志的な意味の場合には進行形が作れます。また、無意志的な行為の場合でも、行為が続いていることを強調して言う場合に進行形が使われます。

He is hearing a lecture on psychology.（彼は心理学の講義を受けている）（hear は意志的な「耳を傾ける」の例）

I'm actually hearing his voice.（本当に彼の声が聞こえているんだよ）（hear は無意志的な「聞こえる」の例）

【see について】

無意志的な「～が目に入る」という場合には進行形は作れませんが、「(見ようとして) 見る」という意志的な意味の場合には進行形が作れます。また、無意志的な場合でも、一時的に見えている場合、錯覚や幻覚が見えている場合、漸次的な変化を表す場合、普段見ることのないような珍しいものを見て感動している場合などでは進行形が可能になります。

When one drinks too much, sometimes one sees doouble.

（酒を飲み過ぎると、時々物が二重に見えます）（see は無意志動詞の「見える」の例）

Something is wrong with my eyes.　I'm seeing doouble.

（目がなんだかおかしい。物が二重に見えます）（see は無意志動詞であるが、一時的状態の例）

I thought they were seeing things.

（私は彼らが幻覚を見ているのだと思った）（see は無意志動詞であるが、一時的状態の例）

I'm seeing it more clearly now.

（それがだんだんはっきり見えてきた）（see は無意志動詞であるが、比較級を伴い漸次的な変化の例）

Imagine: at last I'm seeing the Mona Lisa!

（信じられますか、私は今ついにあのモナリザを見ています）（see は無意志動詞であるが、感情表現の例）

My uncle is seeing the sights in Nago city now.

（私のおじは今、名護市で名所見物しています）（see は意志動詞の「見学する」の例）

Tom is seeing a lot of Mary these days.

（トムは最近メアリーとよく会っている）（see は意志動詞の「人に会う」という意味で、動作の反復の例）

I'm seeing a doctoer tomorrow.

（明日医者に診てもらうつもりだ）（see は意志動詞の「人に会う」という意味で、近接未来の例）

【smell について】

無意志的な「～のにおいを感じる」という場合には進行形は作れませんが、「～のにおいを嗅ぐ」という意志的な意味の場合には進行形が作れます。

I'm smelling flowers.（花の香りを嗅いでいる）（smell は意志動詞の「～のにおいを嗅ぐ」の例）

【taste について】

無意志的な「～の味を感じる」という場合には進行形は作れませんが、「～を味わう」という意志的な意味の場合には進行形が作れます。

I'm tsting the soup.（スープを味わっています）（smell は意志動詞の「～を味わう」の例）

② 思考・心情を表す動詞

114. Do you know him?

（彼のことをご存知ですか。）

115. I think you are right.

（私はあなたが正しいと思います。）

116. Do you understand me?

（私の言っていることが分かりましたか。）

117. I doubt the truth of this report.

（この報告が本当であるかどうか疑わしい。）

118. I like coffee hot.

（私は、コーヒーは熱いのが好きです。）

119. They love each other.

（彼らはお互いに愛し合っています。）

Dr. Higgins's room

思考・心情などを表す動詞も、通例、進行形を作れないのですが、この場合も「意志のある動作」を表す場合には進行形を作ることができます。そのことについて若干補足説明をしていきましょう。

【115.think について】

think は二つの意味に大別できます。一つは意志的に「（頭を使って）考える、検討する」という意味です。二つ目は無意志的に「…だと思っている」という意味です。通例、意志的な「（頭を使って）考える、検討する」という意味の場合には進行形が作れますが、無意志的な「…だと思っている」という意味の場合には進行形は作れません。しかし、普通は進行形が作れない無意志的な「…だと思っている」という場合でも、進行形にすることで断定的な表現を避ける、一種の礼譲表現としての用法もあります。

Please be quiet.　I'm thinking.（静かに。今、考え事をしているのです）（think は意志的な「考える」の例）

I'm thinking of buying the house.（私はその家を買おうかと検討しています）（think は意志的な「考える」の例）

What do you think of him?　（彼のことをどう思いますか）（think は無意志的な「思う」の例）

I'm thinking you are right.（君が正しいと徐々に思ってきた）（think は無意志的な「思う」の例、一種の礼譲表現）

【117.doubt について】

doubt も通例、進行形を作れませんが、特に「いらだちや非難」を表す場合には進行形で使われます。

He is always doubting my words.（彼は私の言うことを疑ってばかりいます）（進行形で非難を表す例）

【118.like について】

like も通例、進行形を作れませんが、好き嫌いの気持ちがまだ決まってないことを示す場合には進行形が使われることがあります。

How are you liking your new job?　（新しい仕事はいかがですか）（話者が相手の好き嫌いの断定を避けている例）

【119.love について】

love も通例、進行形を作れませんが、感情を込めた強意表現として進行形が使われることがあります。

I'll be loving you forever.　（いつまでも愛してるわ）（話者の感情を込めた強意表現の例）

③ 存在や関係を表す動詞

120. We live in Okinawa.

（私たちは沖縄に住んでいます。）

121. The house stands on the hill.

（その家は丘の上に立っています。）

122. The village lies at the foot of Mt. Aso.

（その村は阿蘇山のふもとにあります。）

123. The book remains on the table.

（本はテーブルの上に残っています。）

124. The box contains old photographs.

（その箱には古い写真が入っています。）

125. Orange juice contains vitamin.

（オレンジジュースにはビタミンが含まれています。）

126. The apartment consists of a tiny kitchen and a room with a bed.

（そのアパートは小さな台所とベッド付き１ルームで成り立っています。）

127. Education does not consist simply in learning a lot of facts.

（教育は単に多くの事実を学ぶことにその本質があるわけではありません。）

128. I differ from you about that point.

（その点について私は君と意見が異なっています。）

129. John resembles his grandfather.

（ジョンは祖父に似ています。）

130. You deserve to be happy.

（あなたは幸せになって当然です。）

131. That depends on the circumstances.

（それは事と次第によります。）

④ 所有を表す動詞

132. He has a lot of money.

（彼はたくさんのお金を持っています。）

133. Who owns this land?

（誰がこの土地を所有しているのですか。）

134. They possess a lot of cheep land.

（彼らは安い土地をたくさん所有しています。）

135. These books belong to the library.

（これらの本は図書館のものです。）

Dr. Higgins's room

存在や関係を表す動詞は、通例、進行形を作れないのですが、「一時的な状態」を表す場合には進行形を作ることができます。そのことについて若干補足説明をしていきましょう。

【120.live について】

単純形が「定住している」ことを表すのに対して、進行形は「一時的に住んでいる」ことを表します。

【121.stand について】

「人が立っている」という意味の場合には、単純形より進行形の方が自然に聞こえます。人間はある場所にずっと立っていることはまずないだろうと思われるからです。また「一時性」を表明するために stilll などの副詞が進行形と共によく使われます。「物が置いてある」という意味の場合には、通例、主語が移動可能のものであれば進行形は作れます。しかし、仮に移動不可能なものでも still を伴うことによって進行形を作ることができます。さらに、話し手の主観を反映する場合には still を伴わなくても進行形を作ることができます。

The book is standing on end.（その本は真っ直ぐに立ててあります）（book は移動可能なものの例）

The statue is still standing there.（その彫像はまだそこに立っています）（statue は移動不可なものの例）

The statue was standing there.（その彫像は確かにそこに立っていたんだ）（statue は移動不可で、話し手の主観）

【122.lie について】

「人が横になっている」という場合には、単純形、進行形ともによく使われます。「物が横になっている」という意味の場合には、通例、主語には移動可能で、横になっていると感じられるような、一般に長いものや広いものがなります。「土地などがある場所に位置している」という意味の場合には、主語には移動不可能なものがなり、進行形は作れません。

He lay there for a long time.（彼は長い間そこに横になっていました）

He was lying there for a long time.（彼は長い間そこに横になっていました）

The toys were lying all over the floor.（おもちゃが床一面に散らかっていました）

【123.remain について】

「物が（他の物が除去された後まで）残っている」という場合には、通例、進行形は不可ですが、「人が（ある場所に）とどまっている」という場合には、進行形は可能になります。これは、人間は自ら移動することができますが、本のような物体にはそういう力がないためだと言えます。しかし、ボールなどは風などの自然の力を借りて動くことができるので進行形が可能になります。

He is remaining in the room. （彼は部屋に残っています）

＊The book is remaining on the table. （本はテーブルの上に残っています）

The ball is remaining on the room. （ボールはテーブルの上でじっとしています）

【129.resemble について】

進行形は、通例、作ることはできませんが、more and more, less and less などの副詞語句伴うことによって、類似度の推移を表現する場合には進行形は可能となります。

＊John is resembling his grandfather.

John is resembling his grandfather more and more. （ジョンはますます祖父に似てきています）

注）＊（ｱｽﾃﾘｽｸ）はその文が非文であることを示す。

（２）動作動詞

「動作」を表す動詞の下位区分は、分類の基準を何におくか、また文法家によっても多種多様です。ここでは、柏野(1999) に従って、①継続動詞と②瞬間動詞に分けてみていきます。

① 継続動詞

ある動作をするのに一定の時間を要する動詞を「継続動詞」と言います。例えば、drive（運転する)、have（食べる)、play（する)、read（読む)、run（走る)、sing（歌う)、sleep（眠る)、stay（留まる)、talk（喋る)、teach（教える)、work（働く)、write（書く）などがあります。

136. My father reads the newspaper every morning.

（父は毎朝新聞を読みます。）

137. The mills run night and day.

（水車は昼夜休みなく動いている。）

138. We always sing a song when school starts in the morning.

（私たちは始業時に歌を歌います。

139. The cat stayed out all night.

（猫は一晩中外にいた。）

140. Please stay here until I return.

（私が戻るまでここにいてください。）

Dr. Higgins's room

継続動詞と瞬間動詞を見分けるテストの一つとして時間表現の副詞があります。継続動詞は時間の幅を持っているので、その動作の継続時間を表す〈for～〉「～の間」を付けられるのに対し、瞬間動詞はほとんど時間の幅を持たず、その動作の遂行時点のみを持っているので、遂行時点を表す〈at～〉が付けられます。

We stayed there for three days.（私たちは３日間そこに滞在した）(stay は継続動詞)

We arrived there at nine o'clock.（私たちは３時にそこに到着した）(arrive は瞬間動詞)

しかし、このようなテストは完璧なものではありません。例えば、have（食べる）や drink（飲む）などは継続動詞にも関わらず〈at～〉を付けて使われます。

I have breakfast at seven.（私は７時に朝食を食べる）(have は継続動詞)

I drank a cup of coffee at eight in the morning.（私は朝８時にコーヒーを一杯飲んだ）(drink は瞬間動詞)

通例、「〇〇時に朝食を食べる」という意味は「〇〇時に朝食を食べ始める」ということを意味します。それゆえ、〈at～〉との共起が可能になるのだと思われます。また、「飲む」という行為に関しては、多くの人がその行為に「継続」を感じないのではないでしょうか。柏野(1999) に次のような記述があります。「インフォ―マントのなかには、動詞の目的語に何がくるかを問題にし、例えば、write a letter であれば、短い継続時間を暗示するため、at 句と共起する可能性は高いが、write a novel では、長い継続時間を暗示するため、その可能性は低いと考える人もいる。」

② 瞬間動詞

ある動作を行うのに一定の時間をかける必要がなく、瞬間的に短時間で終わってしまう動詞を瞬間動詞といいます。　例えば、arrive（到着する）、come（来る）、die（死ぬ）、go（行く）、start（出発する）、stop（止まる）、hit（打つ）、jump（飛ぶ）、kick（蹴る）knock（叩く）、leave（去る）などがあります。

141. Caesar finally arrived in Rome.

（シーザーはついにローマに着いた。）

142. The flowers in the garden died from frost.

（庭の花が霜のために枯れてしまった。）

143. The train stopped at the station.

（電車は駅に止まった。）

144. Our bus hit a telephone pole.

（私たちが乗っているバスが電柱にぶつかった。）

145. The cat jumped on to the table.

（猫がテーブルの上に飛び乗った。）

146. He kicked the ball into the goal.

（彼はボールをゴールに蹴り込んだ。）

147. His train leaves at five o'clock.

（彼の乗る電車は５時に出発します。）

Dr. Higgins's room

瞬間動詞が進行形で用いられると、その状況により①行為の反復、②その時点への接近、③段階的変化などの意味を表します。

(a) The naughty boy is hitting the dog.（いたずらガキが犬を何度も叩いている。）〈行為の反復〉

(b) John was nodding his head.（ジョンは何度も頷いていた。）〈行為の反復〉

(c) The boy is dying.（その少年は死にかけている。）〈その時点への接近〉

(d) The Osprey is landing.（オスプレイが着陸しかけている。）〈その時点への接近〉

(e) The weather is changing for the better. （天候は回復に向かっている。）〈段階的変化〉

(f) The days are getting warmer. （日毎に暖かくなってきている。）〈段階的変化〉

(g) Alpinists are reaching the top of Mont Blanc.（何人もの登山家がモンブランに登頂している。）〈行為の反復〉

(h) He is reaching the tops of famous mountains one by one.（彼は次々に有名な山に登頂している。）〈行為の反復〉

上の(g) では主語の複数形が、(h) では目的語の複数形が、一定の期間内において、(g)ではいろいろな人によって、(h)では同一人物が時間を隔てて、繰り返し、反復していることを表しています。

〈〈〈 参 考 図 書 〉〉〉

Guide to Patterns and Usage in English. Hornby, A.S. （1975² Oxford University Press）
『英語の型と語法』AS ホーンビー著　伊藤健三訳注（1977 年発行　ｵｯｸｽﾌｫｰﾄﾞ大学出版局）
『日英語の自動詞研究』高見健一・久野暲著　（2002 年発行　研究社）
『動詞意味論ー言語と認知の接点ー』〈日英語対照研究シリーズ（５）〉　影山太郎著（1996 年発行　くろしお出版）
『機能英文法』村田勇三郎著　（1999 年 10 版発行　大修館書店）
『新版 現代英語文法 大学編』S. グリーンバウム/R. クワーク著　池上嘉彦他訳（1995 年発行 紀伊国屋書店）
『英語の動詞　形とこころ』木下浩利著　（1996 年新訂版発行　九州大学出版会）
『英語のしくみがわかる 基本動詞 24』小西友七著　（1996 年発行　研究社）
『開拓社叢書 テンスとアスペクトの語法』柏野健次著　（1999 年発行　開拓社）
『新英文法概説』山岡洋著　（2014 年初版発行　開拓社）
『英語教師の文法研究』安藤貞雄著　（1984 年再版発行　大修館書店）
『現代英文法講義』安藤貞雄著　（2005 年初版発行　開拓社）
『徹底例解ロイヤル英文法』綿貫陽 宮川幸久 マーク・ピーターセン 他共著　（2002 年発行　旺文社）
『表現のための 実践ロイヤル英文法』綿貫陽　マーク・ピーターセン共著　（2006 年発行　旺文社）
『英文法解説』江川泰一郎著　（1964 年改訂新版発行　金子書房）
『英文法解説』江川泰一郎著　（1991 年改訂第３版発行　金子書房）
『英文法総覧』安井稔著　（1996 年改訂版発行　開拓社）
『英文法シリーズ 特製版 第二集』大塚高信 岩崎民平 中島文雄監修（1979 年第 13 版発行　研究社）
『［例解］現代英文法事典』安井稔編　（1988 年三版発行　大修館書店）
The English Verb. Palmer, F.R. （1988² Longman）
Meaning and the English Verb. Leech, G.N. （2004³ Longman）
Linguistics and Philosoph. Vendler, Z. （1967 Cornell University Press）
A Practical English Grammar. Thomson, A.J. and A.V. Martinet （1986⁴, Oxford University Press）
『第４版 実例英文法』AJ トムソン/AV マーティネット著　江川泰一郎訳注（1988 年発行 ｵｯｸｽﾌｫｰﾄﾞ大学出版局）
『パーマーと日本の英語教育』伊村元道　（1997 年発行　大修館書店）
A Modern English Grammar on Historical Principles: partⅢ. Jespersen, O. （1949, George Allen & Uuwin）
『古代中世英語初歩』市河三喜著　（1984 年 29 版発行　研究社）
『ブルック英語史概論』G.L. ブルック著　櫻井益雄訳（1977 年第５版発行 千城）
『英語史概説』A.F. モセ著　郡司利男 岡田尚訳（1983 年発行 開文社）
『改訂版 英語発達史』中島文雄　（1979 年改訂版発行　岩波書店）
『新英語学辞典　縮刷版』大塚高信　中島文雄監修　（1987 年発行　研究社）
『英語基本動詞辞典〔普及版〕』小西友七編　（昭和 60 年発行　研究社）
『ウィズダム英和辞典 第３版』井上永幸 赤野一郎編　（2013 年発行　三省堂）
『ジーニアス英和辞典 第５版』南出康世編集主幹　（2014 年発行　大修館書店）
「A.S. Hornby 氏の人と業績」山川喜久男　『英語青年』（1979 年４月号）
http://www2.warwick.ac.uk/fac/soc/al/research/collect/elt_archive/halloffame/hornby （閲覧日 2015. 10. 12）